



| | |
|------|---------------------------------|
| タイトル | 新・地政学 「第三次世界大戦」を読み解く |
| 著者 | やまうちまさゆき さとう まさる 山内昌之 + 佐藤 優 |
| 出版社 | 中公新書クラレ |
| 発売日 | 2016年3月10日 |
| ページ数 | 238頁 |

テロ、IS、難民、米ロ、イラン、日中韓関係、混迷を極める世界情勢。「歴史学の泰斗」(山内昌之氏)と「インテリジェンスの第1人者」(佐藤 優氏)が潮流を読み解くための「羅針盤」を示す。豊かな世界史の教養と、外交現場を知り尽くしたリアリティーに基づき、日本の針路と、真のリーダー像を問う1冊である。

まえがきで、佐藤氏は次のようなことを述べている。

地政学は、地理的要素を考慮しながら、政治について考えるというアプローチだ。ここでいう政治は広義の概念で、そこには民族学(文化人類学)、歴史学、哲学、宗教学、経済学なども含まれる。学知全体に通曉^{つうぎょう}し、類い稀な総合力と創造力を持つ山内先生の力によって、21世紀の「新・地政学」が、見事に言語化された。……。

これに対し、あとがきで山内氏は次のように述べている。

本書に関連して思い出に残るのは、2016年1月5日の夜にBSフジの番組「プライムニュース」で2時間ほど佐藤氏と自由に語り合ったことである。佐藤氏がテレビに出演するのは珍しいが、その教養や知識が生きるのは地上波の限られた時間幅では無理だということを感じたものだ。雑誌対談にもまして、テレビ対談は瞬間的なコメントや寸時に本質をまとめる力が要求される。それはタレント化した「専門家」の芸とは似て非なる学術的才能であり、佐藤氏が番組で発揮した才と質はまさに端倪^{たんげい}すべからざるものだったのだ。

このBSフジ討論の一部内容も本書に収められている。なお、この対談はyoutubeにアップされているので、「プライムニュース」、2016年1月5日、佐藤優×山内昌之、2016年世界情勢と日本、などをキーワードでアクセスすれば試聴(164分)できる。テンポの速さと対話の迫力は抜群である。

さっそく、目次を見てみよう。

| | |
|------|--|
| まえがき | —— 考現学としての地政学（佐藤 優） |
| 第1章 | 「第二次冷戦」から「第三次世界大戦」へ —— IS と中東情勢 |
| 第2章 | 世界で噴き出すナショナリズムの深層 —— スコットランド、ウクライナ、沖縄…… |
| 第3章 | 難民危機があぶり出すヨーロッパの「狡猾」 |
| 第4章 | 対シリア、苦悩する西側をロシアの「リアリズム」が囓う |
| 第5章 | 戦略物資と化したエネルギーが世界を動かす |
| 第6章 | 対中、対韓そして沖縄…… 日本の取るべき道 |
| 第7章 | 世界史のリーダー論 |
| あとがき | —— 「アラブの春」から5年目に（山内昌之） |

章ごとに纏めておこう。

第1章は、「第2次冷戦」が「中東複合危機」により「第3次世界大戦」を誘発しかねないという山内の認識をベースに、最新情報から第1次冷戦終結時の回顧までが語られる。

日本から見ると、ISはヨーロッパ、アメリカ、イスラエルを相手に喧嘩しているように見えるが、実は最初に考えているのはシリア派をやっつける、すなわち内ゲバの論理です。

本当の革命をやるためには、まず敵対する新左翼グループをやっつけなければならないという論理。ですから、イランとしてはISと本気で戦わざるを得ない……。

第2章は、ナショナリズムに言及。スコットランド、ウクライナ、東トルキスタン、沖縄と続く。東トルキスタンは、今後の中国のネックになることが示される。沖縄は戦後長らくアメリカの統治下であって、そこからの解放を目指した。その渦中で「反逆としての日の丸」が一つの旗印になった。つまり、アメリカの軍政から抜け出す過程で日本への帰属・返還というナショナリズムの吸引力に統合されていった。ところが、ウチナンチュ（沖縄の言葉で「沖縄人」としてのナショナリズムは、決して死に絶えたわけではなかった……。

第3章は、欧州を揺るがす難民問題である。中東湾岸諸国は大量に受け入れていること、イランは紛争に関与しながら、宗派対立から受け入れていないこと、日本では、成田や関空に大挙してくる可能性について言及。

ようやく戦乱から逃れたシリア難民にとって、これで一安心とは言えない現実がある。彼らが「逃げ場」としてとりあえず選んだのは、ドイツはじめ欧州だった。彼らも「流れて」行くべき場所は、ちゃんと考えている。たとえば、ロシアやイランには決して足を向けない……。

第4章は、中東におけるロシアの戦略である。アサド後を見据えたイランとの主導権争いが論点になっている。プーチンは、「戦争というのは政治の延長だ」というクラウゼヴィ

ッツのテーゼを最も忠実に体現する政治指導者と言える。そう考えると、チェチェン戦争も、クリミア、ウクライナ事変もシリアへの介入も、すべて一貫している。……。

第5章は、戦略物資としてのエネルギーである。サウジアラビアがロシアから原発技術を急遽買うことが出来たのも、長年にわたる情報収集体制や人脈の構築の成果であることや、核拡散時に技術の主導権を握るために売るといふ、ロシアのシニシズムが示される。

南沙諸島の埋め立てが、日本の沖ノ鳥島のそれを手本とした可能性が語られる。また、地球温暖化により、北極海航路が開かれると、津軽海峡や宗谷海峡が地政学的な要地となるという。

第6章は、ここでは日本外交はどう立ち向かうべきかについて」論じている。山内もベースとなる報告書作成に加わった「安倍 70 年談話」から、対中、対韓、対ロ、沖縄が語られる。

第7章は、世界史のリーダー論。本書で討論してきたような変革期には、リーダーの資質や能力とは何かについて言及。資料としては古く 2012 年のものである。

ただ、T・E・ロレンスに関する山内氏によるコメントがあるので記録に残しておこう。

彼こそ 20 世紀最大の隠れた軍事理論家なのです。まさに、注目すべきリーダーの一人である。第一次世界大戦時にアラブのベドウィン諸部族をリードして、オスマン帝国の正規軍に立ち向かったロレンスは、山内氏の知る限り、世界で最も早く本格的なゲリラ戦に取り組んでいたという。彼は本来、考古学者で、職業軍人ではない。しかし、そうした人間が限界状況の中で、新しい戦術を生み出していった。ロレンスは著書「知恵の七柱」(評者の本棚にも「知恵の七柱」3巻がこちらを覗んでいる)に、「十のうち九つは学校や訓練で教えられるけれども、戦場ではその残り一つが必ず出てくる。それは机の上では教えられない」と書いている。学校や訓練で教えられない知見を現場での閃きにも支えられて、実行する。これもリーダーの重要な資質である。……。

さて、ここでは、第6章「対中、対韓、対ロそして沖縄 日本の取るべき道」を見ておこう。

2015年8月14日、安倍首相は戦後70年に当たっての声明、いわゆる「安倍談話」を出した。これは一過性の総理のコメントなどではなく、まさに日本の歴史認識をあらためて整理したうえで、これから我々はこの方向で歩んでいきます、という宣言だった。

この談話は、「戦後レジーム」の再確認そのものだった。世界に向けて、「大日本帝国憲法の時代とは連続性がない日本」という価値観からいささかの变化もない、と改めて宣言した。と同時に「これ以上、後世に謝罪の義務をおおわせてはいけない」という安倍首相の思いをドッキングさせていた。

これについて、海外の評価も、想像以上に高かった。アメリカのある報道官は、「戦後70年間、日本は平和や民主主義、法の支配に対する揺るぎない献身を行動で示しており、すべての国の模範だ」と述べた。……。

山内氏は、「21世紀構想懇談会」のメンバーとして、「安倍70年談話」のベースとなった報告書作成に参加したが、佐藤氏はこれについて、過去にこれほどアカデミズムの成果と政治家の主張が重なった談話の類はなかったと大いに評価している。

さて、「侵略」に触れた、「反省」も「お詫び」もした。しかし、安倍談話には、「あえて述べなかったこと」もある。戦時国際法にも平時国際法にも反する形で、60万人がソ連領に強制連行され、そのうち6万人が死に追いやられたシベリア抑留。なおかつ、北方4島はいまだに不法占拠されたまま……。ロシアとの関係でいえば、日本は「侵略された側」なのですが、そのことは一言も触れていない。本来なら、戦後70年談話に当然書き込むはずのものを、あえて書かなかった。これは、ロシアに対するシグナルで、「貸しを作ったぞ」というのがロシア側に伝わったかどうか？ しかし、そういうロシアにおもねるような外交をやっていて大丈夫なのかという問題もある。…………。

安倍首相が誤解を受ける原因として、首相の言動に影響を与えている三つのファクターが談話の中に混在している点にあるという。

一つ目は、周囲にいる各種の安倍応援団の硬い岩盤です。靖国問題でむしろ首相を突き上げるような政治的保守層の存在です。

二つ目は、連立を組む公明党の意思です。支持母体である創価学会、特に婦人部の絶対的平和主義の力は、公明党も自民党も集票母体として無視できない。

三つ目は、過去の政府の歴史認識を継承した上での未来志向という道筋。

政権運営全般に関して、ベクトルの異なる三つの行動要因が混在して、それがあがる程度国民の目に見えるから、「総理の言うことをどこまで信じていいのか」という疑問を醸成しやすい…………。

2015年末に韓国のソウルで慰安婦問題をめぐる日韓外相会談が行われた。元慰安婦支援をめぐり韓国政府が財団を設立し、日本政府が資金を一括拠出することで合意した。これは日本には法的な責任はないが、政治的な判断でお金を出すという枠組みである。またこの会談では、慰安婦問題について「最終的かつ不可逆的な解決」が確認されたということである。双方の国内的説明については、非難しないということで、玉虫色の解決を図っているようだが、韓国側が今後、「慰安婦問題を蒸し返さない」と約束したが、約束を守るとは約束していない」という大技を出さないという保証はない。さらに、日本側が撤去を求めているソウルの日本大使館前の「少女像」について、韓国外相は、「関連団体と協議して韓国政府として適切に解決するよう努力する」と述べているが、外交の世界で努力についての約束は、拘束力が弱いもので、「最大限努力したが、民間団体側が納得せず、韓国政府としては、どうしようもありません」という結果になりかねない。

「不可逆的」という言葉は外交用語としては何回も約束を破るような信頼しがたい相手

と交渉する際に使われる用語と言われている。

永田町でこういう話しがあるんです（佐藤）。「佐藤君、君ちょっと挨拶が足りないな」と言われて、「いや先生、挨拶ならしました」と答えると、相手は「いや足りないんだ」と。つまり、足りているか足りていないかについては、政治家の方が決めるということです。日韓の関係はこれと同じ構図だという。……………。



韓国人は日本人に我儘を言えば、日本人は面倒くさかって要求を呑む。昔から韓国人はそのことを良く判っている。日本人はそういう民族だと思っている。

さらに、「デタラメな基準で生きている日本人は真の価値が理解できないから、いつも頭を叩いておかないと彼らは何をするか分からない。双方の国民がそれぞれ意見を主張し合って互いに歩み寄る、というものでは決してないのです。日本人がやることは、韓国の主張をただ受け取るだけ。反論や異論などとてもない。繰り返し繰り返し、韓国の言うことを、日本人は心して聞けということです」

本当にそうなのである。彼らはそう思い込んでいる。朴大統領の、あの子供じみた歴史観は、日本の左翼史観よりもとてもない代物だが、それは彼女が子供の時から学んできた歴史観であり、それしか知らないからである。漢字を捨てた彼らは自分たちの歴史を知るすべを持たないからである。そうです、韓国人は自己相対化が出来ないのです……………。

（「日韓 悲劇の深層」（祥伝社新書 ^{にしおかんじ} 西尾幹二・^{おそんふあ} 呉善花）。

今回の合意は賞味期限付きで一定の意味があったと考えられる。すなわち、今回の合意はおそらく、2018年2月、朴大統領が座を降りるまでの期限付きかも知れない！ 世界のあちこちで展開されてきた、日本の尊厳を貶めるジャパン・ディスカウントの動きについて韓国政府が直接に、あるいは支援という形で間接に行ってきた関与をしないことを約束させたからである。とは言うものの、今回の場合、文書でなく口約束ですから拘束力はなお弱い。

今回の日韓合意は、日本には不本意であった。朝鮮半島の不測の事態に備えて、のどに刺さったとげのような慰安婦問題を処理して、日韓の不和を解消してほしいというアメリカの兼ねての要望に日韓両国が押し切られた結果なのである。この観点から、安倍首相の決断はそれなりに理解できるし、保守系も半分ほどの人が合意を評価している。

しかし、話は外交面の対応だけでは済まない。ドイツ在住の川口マーン恵美氏による現地情報では、最近のドイツでは日本のことなどほとんど報道されず、アジアのニュースで目にするのは中国のことだけだったのに、日韓合意だけは大きく報道され、しかも日本は20万人もの少女を拉致して性奴隷としていて、それを日本の政府が認めて謝罪し、10億円を支払うことを決めたというニュースだったという。

最後に付け加えておくと、戦後秩序は連合国によって作られたものなので、負け組の日本が先の大戦に関するアクションを起こすときは、アメリカがどう対応するかということ視野に入れて、相当な理論武装を準備しておかなければならない。

2016.9.22